生涯学習としての子育て支援事業とは
―保育系短期大学の役割を探って―

勝間田　明　子

１．はじめに　－子ども・子育て支援法体制の成立と子育て世帯の不安感－

2012 年、国や地域をあげて子どもや子育て家庭を支援する新しい環境を整えるという目的のもとで、「子ども・子育て支援法」、「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律」、「子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」という 3 つの法律が成立した。この三法をまとめて、「子ども・子育て関連三法」と呼び、2015 年 4 月から、この法律に基づく「子ども・子育て支援新制度」（以下、「新制度」）が施行されたが、各自治体はそれぞれの実情に合わせた事業計画を策定し、その取り組みをスタートさせている。

たとえば名古屋市では､2014 年 10 月に「子ども･子育て支援法」第 61 条（市町村子ども･子育て支援事業計画）に基づき、教育・保育及び地域子ども・子育て支援事業の提供体制の確保と、その他の法に基づく業務の円滑な実施を定めた 5 年計画「名古屋市 子ども・子育て支援事業計画」を策定しており（2015 年 12 月に改訂)、その全文は市のホームページにて自由に閲覧・ダウンロードすることができる。

しかしながら、この「新制度」によって子育てや子どもの教育に「第一義的に責任を有する」（教育基本法）とされる子育て世帯から、その子育て環境が改善されたという意見は聞こえてこない。短期大学において各種の子育て支援事業を遂行している側として「新制度」による変化を実感することもない。それは「新制度」という新しい枠組みの中から零れ落ちる子育て世帯を対象に、我々がささやかな支援事業をおこなっていることが理由として考えられるが、たとえ、この「新制度」の想定する問題および解決の流れから外れているのだとしても、子育てに関わる者たち一人ひとりが切実な悩みを抱えていることに違いはない。

そこで本稿では、まず「子育て支援」という取り組みが必要とされる理由やその原理について整理した上で、保育系短期大学において、大学の有する人材と設備を活かした子育

て支援のあり方を模索しながら実施している子育て支援事業「すくすく広場」における取り組みを紹介する。特にここでは、各種講座の企画・運営を通して浮き彫りになった大学のおこなうべき子育て支援のあり方について検討してみたい。

２．子育て支援が求められる理由

子育て支援の必要性が叫ばれている背景に、少子化や核家族化があることは確かであろう。しかし、これらは価値観の多様化が招いた家族形態の変化であり、それ自体は解決すべき問題ではない。少子化や核家族化の進行によって幅広い年代の人々と接する機会が減少したことで、相互扶助的で親密に関わり合うことを前提とする地域社会や家族が担ってきた子育て文化の伝承という役割が宙に浮いてしまっていることが問題なのである。ここに従来の家族・地域社会の機能を代替する子育て支援のシステムが求められている理由がある。

また、科学技術の進展によって社会の情報化が進んだことに関しても同様に、そのこと自体が問題なのではなく、情報の受け手の能力が追い付いていないことに問題がある。発信される情報が多様化したものの、受け手の情報を読み解く力と生活経験が非常に不足していることにより、情報を効果的に活かしきれていないどころか、溢れる情報の中で人々が右往左往しているという事態がうまれている。多種多様な情報の中で困っている親の不安が子どもの心身の育ちに影響を与え得ることは想像に難くないため、子の育ちを保障する上で、早急に対策を講ずるべき課題であるといえよう。したがってこれは、情報技術と人々の情報リテラシーの間に齟齬が生じたために起きている問題であり、その溝を埋める機能を担うシステムの構築が急がれているということである。

子どもが次世代の担い手であり、未来の希望であることを考えれば、子どもが今この瞬間を謳歌し、未来に夢を描き、「大人になること」に期待を抱く社会をつくることは、大人としての大事な役目である。つまり、その「子育て」は一個人や一家庭が全責任を負うべきものではなく、子育てを社会全体で支えていくことは当然だろう。

したがって、上述の２種類のシステムを現代的に組み合わせた形のシステム、すなわち、価値観の多様化を大切にしながら人から人へ経験を通して受け継がれてきた子育て文化の伝承を担いつつ、科学技術の進展による成果を組み込んだ新たな子育て文化を創出する仕組みを考える必要がある。個を抑圧し異質なものを排除するような地域社会の復活という方向ではなく、異なる個性を持つ一人ひとりがお互いに支え合うことを喜ぶことのできる

現代的なネットワークが求められているのだといえよう。そして、この文化の伝承と創造といった矛盾を引き受け、両者を架橋する実践を創り出すために、絵本や紙芝居等を含む幼児教育関連の充実した蔵書を有し、保育に関連する多様な専門性を持つ人材の豊富な保育系短期大学が、一定の役割を担えるだろうと考えられる。

３．子育て支援の基本となる原理

子育て支援の基本として常に心に留めるべき事項を大別すると、1）一体性の重視、2）関係への着目、3）対等な関わり方、の３つに分けられる。以下では、これらを順に詳述する。

1）一体性の重視　－子どもの保育と子育てへの「一体」的な支援－

保育所における保育の特性は「養護及び教育を一体的に行うこと」（児童福祉施設の設備及び運営に関する基準 第 35 条）であるが、子育て支援の場における保育も同様にこの定義を用いて考えることが重要となる。つまり、子どもと関わる際には、その子どものありのままを受容することからスタートして、その心身の健康を保つことを重視しつつ、子どもの成長や発達を支え、促すよう働きかける必要がある、ということになる。

とくに子育て支援の場合、対象の保護者が支援者からのメッセージを理解し、素直に受け取れるよう細心の注意を払わなければならないが、支援者は保育の専門家であるため、その知識と技術を中核にした支援の方法を考えることが何よりも重要になる。子どもが支援者を信頼して良好な関係が築けている場合、保護者も支援者のことを信頼するものだが、このことは子どもから信頼されない支援者は保護者からの信頼を得ることも難しいということになるため、支援者は子どもの心身の発達に関する知識や理論、そして環境構成の理論や技術を優先して習得するべきだということになる。

上述のことがケアワーカーとしての役割だとすれば、支援者はさらにソーシャルワーカーとしての役割を担うことも期待されている。相談・援助に関する知識や技術を用いて保護者の話に耳を傾け、必要に応じて専門機関の紹介をおこなう必要もある。なお、その話を聴く際には言葉をそのままに受け取るだけではなく、訴えの本質をとらえると同時に、本人も気づいていないかもしれない潜在的要求を掘り起こすことも重要になる。支援者はカウンセリングマインドや人間存在への深い理解を持つことが求められるのである。

2）関係への着目　－子どもと保護者との「関係」の支援－

子育て支援はあくまでも保護者の子どもとの生活を支えることであるため、支援者がいないときにも、本人が子どもとともにいることに喜びを見出せるような方法を積極的にとりたい。

例えば子育て支援教室を実施する際、親子が参加するプログラムは子どもと関わることがより楽しくなるような遊びのヒントを持ち帰れるものにすると良いだろう。つまり「子どもは愛おしい」ということを伝えたい場合、そのメッセージを届けるためには実感を通して身体に沁みこむ形で伝える方法を考える、ということである。

具体的には、保護者が子どもをより愛おしく感じるためのプログラムであれば、子どもの愛くるしい表情を生むような「ふれあい遊び」を中心に立案するとよい。このとき、発達の知識を基盤とし、その場に集う子どもの状況を観察した上で、その発達に応じた「ふれあい遊び」を紹介し、その遊びの持つ「子どもの発達を促す側面」と「子どもと保護者の間に愛着関係をより強固に築いていく側面」の両面を保護者に伝えることが大切である。

先に述べた保育の専門性に立つ子どもの保育と子育てへの「一体」的な支援は、とくに子どもと保護者の「関係」への着目を手がかりに実践を重ねると計画を立てやすいだろう。

3）対等な関わり方　－保護者の「子育てパートナー」としての支援－

支援者と保護者の関係は「支援する人／支援される人」として始まるものかもしれないが、その関係はすぐに「ともに子どもの育ちを支える人」として再構築されなければならない。「子どもの最善の利益（the best interests of the child）」を常に念頭に置き、「その（特定の）子ども（the child）」がのびのびと育つために、それぞれのできることやすべきことを考えることが重要であり、そこに主従関係はない。このことをいつも心に留め、その子どもの心身の健やかな育ちをともに目指す同志として、対等な関係を築く必要がある。

子育て支援に携わる者は、子どもとその保護者の生活を支えるために、さまざまな知識や技能の習得を目指して一人ひとりが自己研鑽を積むべきではある。しかし、支援を必要とする保護者が増え、その保護者のニーズも多様化してきており、子育支援に携わる者に求められ、課せられる業務もさらに多様になってきた昨今、何より重要なことは、それらの業務をすべて一人で担おうとせず、自らも支援者同士のネットワークの中で仕事をすること、そして同時に、支援を必要とする人がそのネットワークの中に入るための道を示すことであろう。

「子どもは言うようにではなく、するように育つ」という言葉が示すように、支援者自身の生き方もまた、人的環境として支援対象の人々に大きな影響を与え得る。支援者同士が互いに支え合い、支え合う喜びと力を実感しながら子育て支援の働きを担っていくことが、その働きの効果をさらに強めるものとなることを肝に銘じておきたい。

４．名古屋柳城短期大学での取り組み　－保護者の学習を支える子育て支援とは－

上述のような子育て支援への思いに端を発し、上に記した原理に基づきながら、保育系短期大学による子育て支援の働きの担い方を模索してスタートした名古屋柳城短期大学での取り組みについて、その概要を以下に紹介する。特に、保護者の学習に焦点をあてた「ミニ講座」の実践について、その成果と課題を考えてみたい。

1）「りゅうじょう すくすく広場」とは

2017 年度より、名古屋柳城短期大学では子育て支援事業「りゅうじょう すくすく広場」を開始させた。これは前年度の４月に開設した「あかちゃん広場」を発展的に解消したものである[1]。この子育て支援事業全体を貫く活動の目的は「０－１歳児とその保護者、学生、スタッフのそれぞれが、のびのびと気持ちの良い環境で、お互いに交流し合い、学び合って、すくすくと育ち合うこと」であり、活動時間は平日 10 時から 12 時の間で設定することとした。

「りゅうじょう すくすく広場」は大きく分けて、事前申込の要らない活動と事前申込が必要な活動の２種で構成されている（表１）。

表１　りゅうじょうすくすく広場

名称	曜日・時間	対象	申込
すくすくタイム	月・水・金　10：00 ～ 12：00（通年） （祝日・年末年始・講座開講日はお休み）	0、1 歳児と保護者	不要
【講座】0 歳児にこにこクラス	月　10：00 ～ 11：30	0 歳児と保護者	要
【講座】1 歳児わいわいクラス	金　10：00 ～ 11：30	1 歳児と保護者	要
【講座】ミニ講座	すくすくタイム内（年に４～５回）	0、1 歳児と保護者	要
あかちゃんクラブ	火　10：00 ～ 11：30（全 10 回）	0 歳児と保護者	要

前者は、登録者（6か月更新制）が自由に参加できる「すくすくタイム」（保育資格を持つ専属スタッフが2名常駐する時間。入退室自由）である。月・水・金曜日の10時から12時まで、子どもと保護者がともに遊べる環境を整えたキッズルームを開放している。

室内の環境構成には、保護者と子どもがゆったりと触れ合ってほしいという願い、それと同時に、子どもが他の子どもと出会うことや保護者が他の保護者と出会うことによって、互いに育ち合い、語り合って欲しいという願いが込められており、先に触れた子育て支援活動の目的を、環境を通して参加者に伝えようという試みがなされている。もちろんスタッフに育児や発達に関する相談もできるが、スタッフの主たる仕事は、室内の状況を観察しながら、適宜、環境を構成していくことによって保護者同士の交わりや子どもの活動を広げる働きかけをおこなう間接的な援助である。

後者の事前申し込みが必要な活動には「あかちゃんクラブ」、「にこにこクラス」、「わいわいクラス」、「ミニ講座」の4種類がある。ミニ講座に関しては後述するため、ここではそれ以外の3つの事業について述べる。

「あかちゃんクラブ」は、0歳児とその保護者（定員15組）が連続して半期5回のプログラムに参加するものであり、教員の指導の下で専攻科保育専攻（保育資格あり）の学生が自由遊びやふれあい遊びを中心としたプログラムを企画し、実践している（レクリエーション・インストラクター資格取得のための授業に組み込まれている）。なお、この活動は上の「すくすくタイム」の時間帯ではなく、火曜日に独立して行われる。

「にこにこクラス（0歳児対象）」と「わいわいクラス（1歳児対象）」は、2年生対象の教職実践演習とリンクして実施されるものであり、そこでは短大の専任教員によるオムニバス形式のミニ講義（20分程度）を含むプログラムが組まれ、本科の学生が学内で保護者支援のあり方を学ぶ良い機会になっている。

この「にこにこクラス」と「わいわいクラス」は今年度後期に初めて開講する講座であり、参加希望者数が予想できずにいたが、昭和生涯学習センターとの共催の親学講座「発見いっぱい　1歳児の成長」（合計5回の講座で構成され、各回を本学教員がテーマを定めて担当する）の積年の実績と、昨年度の「あかちゃん広場」、今年度前期の「すくすくタイム」や「あかちゃんクラブ」によって、キッズルームの雰囲気と短大の子育て支援の様子を好意的に捉える層からの期待度は高く、いずれの活動も申込開始からすぐに定員に達した。とりわけ、1歳児対象の「わいわいクラス」に対する希望は多く、申込受付を始めた午前9時に申し込みが殺到し、1分も経たずに定員を超過することになった。

今年度の受講生については、先着順としたので定員に達した時点ですぐに申し込みを締め切り、その旨を HP 上で周知したが、子育て世帯に関する調査･研究のためを考えれば、申込期間をある程度長めに設定し、どれほどの要望があるのかを把握することも必要だったかもしれない。受講生の決定も、先着順とせずに、例えば、参加する子どもの月齢が偏らないようにバランスを考えたうえで抽選にする等、学術機関としてなんらかの意図をもった判断を下しても良いだろう。この点は、来年度に向けて熟考すべき課題である。

２）ミニ講座の概要

ミニ講座とは、「すくすくタイム」（月・水・金の 10 ～ 12 時）の時間帯に設定され、外部講師を招いて子どもの育ちや保護者自身の子育てに関する悩み・心配事を軽減するような内容を考え、企画するものである。講座の前に「ミニ」と冠した理由は「講座」の持つ堅いイメージを打破する目的があった。また、講師による講話を 20 ～ 30 分程度、質疑応答も同じく 30 分程度として、なるべく参加者が声を出せるよう願ってプログラムを組んだ（表２）。

なお、「すくすくタイム」は通常、入退室が自由にできるように設定しているが、この講座日のみは室内掲示や HP 上で周知して定員を決めた事前申込制とした。

表２　ミニ講座のプログラム

10：00	開場（→自由遊び）
10：30	講座開始（20 ～ 30 分）
11：00	質疑応答等 （講師とのフリータイム）
11：30	講座終了（→自由遊び）
12：00	終了

10 時開場、10 時半に講座開始としたが、参加される方々には 10 時 15 分までには入室し、10 時半の講座開始時には部屋の雰囲気に慣れてリラックスした状態でいられるようにお願いしている。

日程は、先述の「発見いっぱい 1 歳児の成長」の終了から「にこにこクラス」･「わいわいクラス」開講前の 7 月下旬から 9 月の初旬、あるいは「にこにこクラス」･「わいわいクラス」終了後の 11 月半ば以降に開催することとした。そして内容は、①小児歯科医を講師とする口腔内の話「あかちゃんのお口のためにできること」と、②薬剤師であり薬膳師である講師による心身の健康と食事の話「イライラしたくない人のためのお手軽薬膳」の 2 種類を候補とし、企画を練ることにした。

このミニ講座は、4 月から 6 月までのすくすくタイムに集う子どもたちを観察し、0 歳児の活動の姿と 1 歳児のそれとの違いを鑑み、初回は参加者を 0 歳児とその保護者限定、

定員を20組とし、初回の状況をふまえて、0－1歳混合あるいは1歳児だけの回を設定することとした。活発な子どもたちとともに落ちついて話を聴くための環境構成のあり方を熟考した上で、1歳児の回は冬頃に実施する予定を立てたいと考えたからである。

しかし、初回に設定した0歳児用のミニ講座「あかちゃんのお口のためにできること」の参加者募集の告知プリントをみた1歳児の保護者からの早期開催の希望や問い合わせが多く寄せられたため、急遽、予定を繰り上げて9月の初旬に1歳児の会を設けることになった。したがって、7月、8月、9月に各一回のミニ講座を実施することになったのである。

これまでの講座は、先述の「発見いっぱい 1歳児の成長」のように、学内の教員が講話をおこなう形で保護者の子育てを支えることを主として実施されてきたが、この「ミニ講座」は地域に根差す短期大学として、学外の専門機関・専門家と連携し、ともに子育て世帯を支えるネットワークの構築を目指して始動した試みである。

3）ミニ講座の企画、周知、実践を通してみえてきた課題

上に記した経緯で、7、8、9月に各一回、子どもの対象年齢を「0歳児のみ（初回:7月）」、「0－1歳児混合（2回目：8月）」、「原則として1歳児、要望があれば0歳児も可とする0－1歳児混合（3回目:9月）」としてミニ講座「あかちゃんのお口のためにできること」（7月、9月）と「イライラしたくない人のためのお手軽薬膳」（8月）を開催したが、この3回を通して次の3つの重視すべきポイント、①ネーミング、②タイミング、③保護者の個別性、に気づくことができた。

以下では、この3つを説明した上で、今後の課題をまとめ、3回の実践から見えてきた保育系短大が子育て支援をおこなうことの意義と使命について考えてみたい。

①ネーミングの重要性

講座名に「ミニ」と冠した理由は先に述べたが、この実践を通して、ミニとはいえ「講座」という名前の持つ座学の堅苦しいイメージに配慮する必要に気づくことができた。参加者を募集した初日、2日目には全く申し込みがなく、これは周知の仕方に問題があると考えて、周知方法の再検討をしていたところ、あかちゃんクラブで関わりのあった方から「このミニ講座は、難しい話を勉強する会なのか」という問い合わせがあり、そういった誤解が生じていることがわかった。そして室内掲示をしてあったチラシに気軽な「おはなし会」であり、質問時間を長めに設ける旨を追記すると、徐々に参加申込が増えていったのである。

これまで実施してきた親学講座に準じて「講座」という名称を用いたが、言葉の持つイメージの力を強く感じた一件である。ただし、誤解が生まれたとしても対話的な関係があれば、その縺れは解消できるということもわかった。したがって今後は、誤解を生まない配慮を徹底することと同時に、対話的な関係を構築することの両方に力を入れていきたい。

②タイミングの重要性

小児歯科医によるミニ講座については、1 歳児の保護者からの問い合わせが圧倒的に多く、子どもの歯が上下ともに生えはじめ、離乳食を完了した時期に適したテーマだったことがわかる。「子どもと一緒でも落ち着いて話を聴ける低月齢のうちに受講しよう」という意識を持った 0 歳児の保護者の申込を予想し、0 歳児の保護者の方が多く参加することを見込んでいたが、すくすくタイムに集う保護者の大半は「現在の子どもとの生活」に気持ちが向いており、数カ月先のことに対する具体的なイメージが持ちにくいということ、そして、そもそも「すくすく広場」への登録者は、0 歳児よりも 1 歳児の方が圧倒的に多いことを再確認した。

つまり、支援対象の保護者にとって「ちょうどいい時期」にこういったプログラムを実施することが重要であり、今の悩みや心配事を解決することを通して、自らの抱えている問題に気づき、それを解決するためにとるべき方法それ自体の学習を習得できるようなプログラムにしていくことが必要であるということである。また「すくすく広場」に登録している子どもの月齢構成と参加状況を検討し、低月齢の 0 歳児も安心して遊べる空間が確保できるよう、早急に環境構成を工夫しなくてはならない。

③保護者の個別性

先述のように、質疑応答の時間を長く設けたプログラムにしたが、講師からの話の後、質疑応答の時間として参加者全体に問いかけ、挙手を促しても反応はなかった。しかし、会を閉じた後、個別に相談できる時間を設けると、どの会でも講師の前に長い列ができるのである。客観的には「同じ」内容の質問であっても、参加者一人ひとりが講師と個別にやりとりをしたいように見受けられる。参加者の個人として関わってほしいという願いが根底にあるのだろう。講師たちの話によれば、この傾向はどの講演会場でもみられると言う。

このことはまた、参加者がともに学び合う「学習集団」になっていないことも理由とし

て考えられるため、今後はプログラムにアイスブレイクやペアワーク等を組み込み、個々の育ちと集団作りを並行して考える必要があろう。今後はプログラムを工夫したうえで、参加者の言動について比較検討してみたい。

3回の実践を通して、ミニ講座を企画する上で重視すべき3点を析出したが、同時に、保育系短大が子育て支援をおこなうことの意義と使命も浮かび上がってきた。それは、短大の有する教育的資源を充分に活かして環境を構成し、①子育て中の保護者が学び合う場を創ること、②大人の学ぶ姿に子どもが出会う機会を創ること、の2つである。「子育て」を契機として人と人が繋がること、喜んで学ぶ大人の姿に接することこそが、子どもの心に学びの種を蒔くことになる。

ことに、発達段階の異なる0歳児と1歳児がともに遊びこめる室内の環境構成は難しく、まだ試行錯誤の域を出ないが、学校の強みである物的環境と人的環境を豊かに用いて、保護者の学びを保障していきたいと思う。また、その活動の内容と意義を文章化し、広く発信することで、当日の参加者だけでなく、様々な事情によってその場に集えなかった人々に伝えていくことも、短期大学の専門性を活かした支援のあり方だろう（報告1および2）。

5．おわりに

子育て支援事業に尽力する機関や施設、団体は多く、その形態も多様である。その中で、保育系の短期大学が積極的に取り組んでいくことには、①地域社会の知の拠点として地域社会へ教育資源を還元するため、②保育者養成校として学生に子育て支援の実践的な学びを提供するため、③教育・研究機関として子育て世帯の実際をふまえた子育て支援事業のモデルケースを創出するため、の3つの意義がある。

とりわけ子どもの保護者が学校教育に良い印象を抱いていない場合、学校という名のつく場所から足が遠のくものである。しかし、例えばそれが初めは子育ての必要に迫られ、誰かに背中を押されてようやく門をくぐるような消極的なものだったとしても、学校という空間で学ぶ喜びを感じることができたなら、その経験は後の人生でライフクライシスに直面した時の対処方法を大きく変えることになる。また、その子どもやその家族、周囲にも学ぶ喜びが伝わり、学校や学習に対するポジティブなイメージを伝えることになるだろう。

学校は単に知識や技能を習得するだけの場所ではなく、たくさんの個性豊かな人とともに学び合い支え合う喜びを実感する場所であってほしい。学校を地域に開き、子育て支援

の取り組みを生涯学習の観点から位置づけていくこと、そして、個人の学びが、学び合い支え合う喜びに発展するように働きかけていくことこそが、短期大学による子育て支援の担うべき使命であり、子どもの生活をより文化的で豊かなものにするための確かな一歩になるのだろうと思う。

注

1　「あかちゃん広場」は専攻科保育専攻の授業の一環としてスタートした子育て支援事業である。その目的は、学生の「子育て支援の実践的な学び」であり、大学の「地域貢献」である。対象は、0-1 歳児とその保護者（各回 20 組以内)、時間は 10:00 ～ 11:30 の 1 時間半、実施回数は年間 10 回。会の企画・準備は教員 2 名と専攻科 1 年生 5 名によっておこなわれた。この「あかちゃん広場」の理念およびその実践を通した学びについては、拙稿「子育て支援広場における実践的学び」(『名古屋柳城短期大学紀要　第 38 号』、pp.177 － 184、2016 年）を参照のこと。

（報告 1 ）【2017 年 8 月 25 日】「イライラしたくない人のためのお手軽薬膳」

8月25日（金）は「りゅうじょう すくすく広場　夏のミニ講座」を開催しました。

テーマは、「イライラしたくない人のためのお手軽薬膳」。
講師は、薬剤師であり 国際中医薬膳師である 市川　歩先生です。

講座がスタートする10時半までは、お部屋で自由遊びです。
夏休みの今日は、7名の学生（保育資格あり）がお手伝いに来ています。

たくさんの優しい手と温かい眼差しにまもられている子どもたち。
やりたいことが広がり、自己肯定感が育ちますね。

ボールプールを少しだけ部屋の前方によせて、講座が始まりました。
ボールプールの中から真剣に聴いている子もいましたよ。

陰／陽の話を皮切りに、感情の分類（感情に「良い・悪い」はなく、全部大事です！）、
薬膳の考え方の基礎や、積極的にとりたい食材についての具体的なアドバイスなど、
予定時間の30分をだいぶ越えて（！）、色んな話をうかがうことができました。

「イライラすると甘いものを食べ過ぎちゃうんだけど…」
「白きくらげってどうやって調理するの？」、、、等々、
皆さんとの対話の中でうまれた問いにも、丁寧に応えていただきました。

大人が学び合う機会を創ること、子どもが大人の学ぶ姿に出会う機会を創ることも、
大事な子育て支援の取り組みであり「りゅうじょう すくすく広場」の使命だと思いました。

（報告２）【2017 年 9 月 4 日】「あかちゃんのお口のためにできること」

9月4日（月）、今年度3回目となる「りゅうじょう すくすく広場　夏のミニ講座」を開催しました。テーマは「あかちゃんのお口のためにできること」。
講師は、小児歯科専門医　林　志穂先生です。

7月には0歳児対象の同講座をおこないましたが、1歳児のお母様方から「わたしたちも聞きたい」「1歳児の回を開いてほしい」というご要望を多数いただき、お互いに日程を調整して、9月にも実施できることになりました。

今日も、講座がスタートする10時半までは お部屋で自由遊び。
今回は、5名の学生（保育科2年生）がお手伝いに来てくれました。
彼女たちは1歳のこどもたちと触れ合えるこの機会をとても喜んでいます。

さぁ、開始時刻に15組のみなさんが揃いました（ミニ講座は申込制です）！
賑やかな和気あいあいとした雰囲気の中でスタートです。

志穂先生の「大事なことをたくさん伝えたい！」という熱意と、参加者の皆さんの「知りたい！学びたい！」という熱意が うまく解け合い、充実した時間になりました。虫歯予防の基本や歯並びを悪くする生活習慣について、事例や図解、写真を用いた説明に、一同、驚いたり、頷いたり。。。

講演が30分強で、質疑応答の時間も30分（贅沢です）！お一人おひとりにじっくりとお応えくださる先生と、一言一句もらすまいと真剣な表情で話を聴く参加者のみなさんの双方のお姿を拝見しながら、

「情報化社会」の溢れる情報の中で暮らしているからこそ「信頼に足る情報」の見極めが難しいということ、また皆さんが個別に悩みを抱えておられること、の2つを痛感しました。

次回のミニ講座は2－3月に実施する予定です。「りゅうじょう すくすく広場」の講座が様々な情報の中で戸惑っている方々への「光＝道しるべ」になるよう、静かに祈りながら、今後の活動を考えていきます。

Childcare Support Programs from a Perspective of Lifelong Iearning in a Junior College for Training of Nursery Teachers

Katsumata, Akiko*

本稿では、子育て支援が必要とされる理由やその原理について整理した上で、保育者養成に携わる短期大学が子育て支援をおこなう意義と目的について検討した。それらを大別すると、①地域社会の知の拠点として地域社会へ教育資源を還元するため、②保育者養成校として学生に子育て支援の実践的な学びを提供するため、③教育・研究機関として子育て世帯の実際をふまえた子育て支援事業のモデルケースを創出するため、の３つにまとめられる。

そして現在、短期大学で実施している子育て支援事業「すくすく広場」でのミニ講座について紹介し、その企画・運営を通して浮かび上がってきた短期大学の使命について考察した。それは、①学校を地域に開き、子育て支援の取り組みを生涯学習の観点から位置づけていくことであり、②個人の学びが学び合い支え合う喜びに発展するように働きかけていくことである。そういった目的や使命を中核とする実践を積み重ねていくことで、子どもの生活がより文化的で豊かなものになると考えられる。

キーワード：子育て支援，生涯学習，社会教育

**Nagoya Ryujo Junior College*